

混浴しながらデカパイで全身を洗われて、最後はアナル舐め  
尻尾パイズリからのラブラブ飲尿までしてもらうお話  
(混浴/洗体/アナル舐め/パイズリ/ラブラブ飲尿させ)

■ ■ ■ ■ ■

「——ほら、恥ずかしがらないの。もう別に気にならないで  
しょ？」

別の日。あなたとユカリは脱衣所にいた。

あなたの家の脱衣所は、脱衣所と言ったところで特段しつ  
かりとした区画がされているわけではない。元々は男一人暮  
らしの家である。洗濯機も洗面台も混在していて、ただ浴室  
へとつながっている空間というだけ。

そんな粗野な場所にユカリがいることも異常な事態だが、  
そのユカリにあなたが脱衣を手伝ってもらっているのもま  
た、異様な光景だった。

「はい、脱がせるよ。首下げて～」

左腕が利かないあなたにとって、日常の着衣も脱衣も不便であることは確かだった。怪我をした当初は猫の手も借りたいと思ったものだが、今こうしてユカリに脱衣を手伝ってもらっている状態では、明らかに恥ずかしさの方が勝つ。

しかし、ユカリはそんなあなたの困惑などそっちのけで、すっかり慣れた手つきであなたの上半身を裸に剥いていくのだ。

ユカリの表情もいささか緊張している。もっともそれは、あなたと脱衣所にいるという状況に対してではない。

触れているのは、他ならぬあなたが怪我をしている上半身なのだ。万が一があってはいけないと、ユカリは口調こそおどけているが、顔つきは真剣そのものである。あなたの介助をするようになってからしっかりと勉強をしていたユカリの手つきに不安はないが、あなたを困らせるのは間近にあるユカリの顔の方だった。

緊張し、真剣なユカリの表情。間近で見するには精悍で、そして美しすぎる。こんなに近くでユカリの顔を見た人間など

いないのではないかとさえ錯覚してしまう。

ユカリの出演した舞台やライブの特典映像の中でのみ、時折見ることの出来る表情だった。切れ長の目が印象的で、直視されれば視線を合わせていることに耐えきれないかもしれない。

しかし、そんなユカリの視線が射抜いているのはあなたの身体。何万人を前にするステージに向かうときと同じ緊張感で、ユカリはあなたの介助と向き合っているのだ。

それが、あなたの心の良くない部分を刺激する。男の独占欲とも、優越感とも取れない感情。この女が自分のモノだと、誰かに自慢したくなるような衝動だ。

もし今あなたがユカリの唇にキスしても、その小さな顔をねぶるように舐め回しても、柔らかな身体を抱きしめても、彼女は文句一つ言わないだろう。もっとも、抱きしめることは今のあなたの身体では難しいのだが。

「はい、上おしまい」

そんな邪な考えが浮かんでは消えていく間に、あなたはすっかり上半身裸にされてしまった。服を脱いでみると、怪我の痕がやはり痛々しい。しかしそれでも、当初と比べれば明らかな快復傾向だった。

「ん……経過はいい感じ、なのかな？」

上半身の脱衣介助を終えたユカリは、少しだけ緊張が解けたように微笑む。あなたもそんなユカリを安心させようと、頷いてみせた。

そして上半身が自由になったあなたは、ユカリにはそのままリビングへ戻ってもらい、自分で部屋着のスウェットを脱ごうとするのだが――

「――あ～、ダメだよ♡ そっちもボクがやるんだから♡」

呆気なく、ユカリに止められてしまった。

「ダメダメ♡ こっちを脱がすのも楽しみなんだから♡ ボクの楽しみ、奪わないでよ♡」

あくまであなたの下半身までも裸にしようとするユカリ。  
そんな彼女とあなたは押し問答に——なるわけがない。

あのユカリに、アイドル声優のユカリに下半身まで脱がせてもらえる。当初は羞恥心から躊躇っていた行為も、一度経験してしまえば強烈な優越感に変わる。

それを知っている以上、あなたがユカリの提案を断れる訳がないのだ。

「ふふっ……いい子♡　じゃあ、脱がすね♡」

大人しくなったあなたを見て満足そうなユカリ。彼女自身も、言いようのない支配感に酔っていた。躊躇いながらも自分の言いなりになってしまうあなたに、母性と情欲の入り交じった感情を抱いてしまう。

そうして逸る心のままに指先を動かして、ユカリはあなたのスウェットの腰紐に手をかけた。

しゅるり、と簡単にほどける。緩いスウェットの上からで

もわかるくらいに、肉棒は大きくなっている。

「欲張りさん……♡」

ユカリは微笑み、そしてもったいぶるようにゆっくりとスウェットを下ろす。勃起した肉棒で今にも突き破られそうなパンツが姿を現した。

「こんなにしてる……♡ エッチなんだから、もう……♡」

困ったような声を、全く困っていない表情で出すユカリ。そうしてそのままあなたのパンツを下ろしてくれるかと思いきや、そうはしてくれない。

「ほら、つんつん……♡ ワガママさん、お待たせ♡」

指先で股間の膨らみを刺激する。布越しとはいえ、本来は肉棒になど触れてはいけないユカリの指先。それがあなたの膨らみを弄ぶようにつつき、撫で、そしてなぞっていく。

それだけではない。

「んっ……♡ ちょっと蒸れてる……最近、急に暑くなったもんね……♡ ん、う……♡」

まるでそうするのが当然とでも言わんばかりに、ユカリはあなたの下半身に顔を埋めた。

あなたの身体が緊張する。そんなあなたを咎めるように、ユカリはあなたの無事な右手を取って優しく握る。まるで母親が子供をリラックスさせるように、ニギニギと。

すう～……♡ すう～……♡ すんっ……すんっ……♡

ユカリの呼吸の音だけが脱衣所に聞こえてくる。小さなユカリの顔は、あなたの股間へ簡単に埋まってしまう。先ほどまで間近で見ていたあの顔が、今はあなたの下半身にハグしていると思うと、強烈な罪悪感が襲ってきた。

しかし、その罪悪感とは裏腹に、あなたの肉棒はどんどんと固さを増してくのだ。

「すんっ……♡ すんっ……♡ はぁ……♡ すごくエロいニオイする……♡ おかしいよね……こんなの、本当は臭いはずなのになぁ……♡ キミのだと思うと、全然イヤじゃない……♡」

鼻先を股間に埋めながら、ユカリはあなたの方を見つめる。あなたの反応を楽しむようでもあり、今ユカリが嗅いでいるニオイの主を、彼女自身の脳に焼き付けようとしているようでもあった。

「っと……いけないいけない……♡ 先っぽ、濡れてきちゃったね♡」

あなたの意思とは関係なしに、肉棒の先端からカウパー液があふれ出してくる。肉棒に与えられる性感と言えばユカリの呼吸くらいにも関わらず、それでも性欲は過敏に反応した。

「パンツダメになっちゃうから、脱がすね♡ まあ、ダメになったらなったで、ボクが貰っちゃうけど♡」

ユカリの提案に対して、あなたは思わず“何のために？”



と問いかける。

「ん〜？♡ ボクが家で、キミのコトを思い出しながらオナニーする用に♡」

ユカリは悪戯っぽくはにかむが、あながち冗談だとも思えなかった。彼女があなたの家へ来るようになってからというもの、身の回りのことは甘えてしまっている。使い古した肌着やタオルが無くなっていた気がするが、もしかして……。

だが、そんな疑問もすぐに雲散霧消する。ユカリが、あなたのパンツの腰に手をかけたからだ。

「ほら、脱がすよ〜♡」

腰のゴムをユカリの指に緩められて、ゆっくりと下ろされていくパンツ。

しかしユカリは、脱がしかけのパンツを、わざとらしくあなたの肉棒へとひっかけた。

「あれれ、おかしいね♡ これじゃあパンツ脱がせられない  
なあ……♡」

意地悪を口にしながら目を細めるユカリ。そのままパンツ  
を左右にひねってみたりして、あなたの亀頭を刺激する。

「ダメだよ、そんな美味しそうな顔したら♡ 本当に食べた  
くなっちゃうんだから♡」

切なそうなあなたの表情を見て満足したのか、ユカリはパ  
ンツを下ろしきる。今か今かと解放の時を待っていた肉棒が、  
その姿を現した。

「もう、お風呂入るだけなのにこんなにして……♡」

口では文句を言いながらも、ユカリは肉棒から視線を外さ  
ない。それどころか――

「んっ……♡」

その唇で、肉棒にキスまでしてみせた。

ユカリの唇。リップも付けたままの艶やかな唇。時折使っている化粧品をSNSで紹介しているせいで、男のあなたでも何となく名前を知っているリップ。それで、あなたの肉棒に跡を付けていく。

「このあとすぐにボクが洗ってあげるから……関係ないよね？♡」

そう言いながら、ユカリは何度も何度もあなたの肉棒へキスを降らせる。

「えへへ……マーキング♡」

とてつもなく卑猥な行為をしているというのに、ユカリは子供っぽく笑うのだ。そのギャップに、肉棒も理性も壊れそうになる。

「ん……れえ……♡」

ユカリが舌を出す。赤くて少し長い舌。先端に向かっていくほどに細長くなる、形すら卑猥な舌。

んれろ～……♡と音がするような執拗さで、ユカリは自らの舌を使ってあなたの肉棒を舐めあげた。

「ん、れろ……♡ えろお～……♡ んちゅ……♡ ちゅっ……♡ れろお～……♡」

リップの跡を舐め取るように、あるいは馴染ませるように。肉棒全体をテカテカに光らせてワックス掛けするように、唾液をまとわせていく。ユカリの舌があなたの肉棒の表面を何往復もして、尿道やカリ首の起伏を細い舌先で愛でていく。

「——つとと……♡ つい夢中になっちゃった♡ お風呂に入らないといけないんだった♡」

あなたの性感が高まり、睾丸の中でぐつぐつと精液が煮えたぎり、尿道を遡ってきそうになる。その直前で、ユカリはフェラチオを止めてしまった。

焦らされている。それはあなたにだってわかる。

ユカリにはバレているのだ。男の射精はギリギリまで焦ら

した方が気持ちいいのだと。ユカリは、あなたのオナサポ係として役目を全うするため、射精を焦らしている。

それがわかっていても——いや、わかっているからこそ、あなたはユカリの言いなりになってしまうのである。

「それじゃあ、お先どうぞ♡ ボクもすぐにいくから♡」

ユカリはあなたを先に浴室へと促す。

しかし、ユカリに言いなりのあなたと言えど、このまま先に浴室へ行く気は無かった。

「ん～？♡ ボクが服脱いで裸になるところ、見ていたいの？♡ ——すけべ♡」

ユカリとて、あなたの意図はわかっている。あなたが素直に浴室へ行かないことすら知っている。全てわかったうえで——今からあなたの目の前で、ストリップショーを始めようとしているのだった。

「んしょ……っ♡」

ユカリはわざとらしく声を漏らしてトップスを脱ぎ去った。本人申告で“二つも小さなサイズのブラの中へギチギチに収めた”という乳房が露わになる。

今日のユカリの服装もシンプルだった。緩く丈の短いタンクトップにデニム。そしてアウターとしてのジップパーカー。ユカリの髪色と同じく黒系統でまとめられたその服は、構成だけ見ればスポーティーな印象を受ける。

しかし、それはあくまで服のそれぞれの要素を見たときだけだ。それをユカリが着るとなれば、目の毒以外の何物でもない。

豊満なバストは、当然ながらタンクトップの中で大人しくしているわけがない。ブラジャーの拘束も何のそのと言わんばかりにタンクトップの裾を持ち上げ、見事な乳カーテンを作り出している。

男性であれば否応無く視線を吸い込まれるカーテン。そこ

から視線を逸らそうにも、カーテンより上を向けば飛び込んでくるのはユカリの顔である。これもまた、美しすぎて直視し難い。黙っていれば憂いを帯びたように見えるその瞳が、男性の情欲をかき乱す。

であれば、視線を逸らす先はカーテンの下側しかなかった。

しかしどうだろう。その下も強烈である。

「どう？♡ ピアス新しくしたんだ、似合ってるでしょ？♡」

ユカリが誇らしげに示すピアスとは、耳に付けているものではない。ユカリの露出した腹部、その中心にあるへそに鎮座している銀色のソレである。

乳房の生み出すカーテンから視線を下に逸らせば、ほっそりと引き締まったユカリの腹部が目に入ってくる。

豊かな乳房に対して、無駄な肉がほとんどついておらずうっすらと腹筋のラインが浮かぶ腹部。両者の間には強烈な高低差が生み出されている。

ユカリはライブでの衣装に限らず、私服でもお腹周りを露出したコーディネートを好む。その理由は、この高低差にあった。存在感のある乳房に合う普通の丈の服を着れば、どう頑張っても着膨れして見えてしまうのだ。

「見せる部分だからね。こうしてお洒落もメイクアップもしないと」

そう言いながら、ユカリは指先で自分の腹部をなぞって見せた。

確かに造形美としても美しい。しかし、それは見せびらかして良いのだとイコールになるわけではない。ユカリの腹筋と下腹部の境目はひどく曖昧だ。肉付きの薄いユカリの下半身は、鼠径部までハッキリと陰影が刻まれている。それを露出しながら生活されては、男性は目のやり場に困るというもの。

盗み見るので精一杯。目に焼き付けようとすれば、下半身の方が反応してしまう。不躰な男たちですら遠慮をする肉体美。それがユカリの身体だ。



それ故、ネット上には様々な代物が出回っている。

「みんな、ボクの身体好きだよね〜♡ ボクの写真使ったコラ画像……は、まあ実物のボクの方がエロいからあんまりないかな？♡ それよりも、番組出たときの切り抜きとか……普段の自撮りとか……♡ ファンの人だけじゃなくて……単にシコりたい人もいるのかな、ああいうのって？♡」

ユカリはあなたに問いかける。あなたは当然“わからない”と言わんばかりに首を振るが、そんなあなたの反応——というよりも、あなたの肉棒の反応を見て楽しんでいる。

あなたに問いかけるユカリの声色は甘い、それは決して自分が性的な視線で見られていることを喜んでいるのではない。これもまた、あなたに媚びているのだ。

世間の男性たち——それこそ、ユカリのSNSにいる五十万人以上のフォロワーのうち、男性であれば大多数が性的な目線で見ているユカリの肢体。それを、今のあなたは舐め回すように見て良いのだという優越感。それをあなたに与えているのである。

「握手会とかでもけっこういるよ♡ ボクの顔なのか、おっぱいなのか、どっち見てるのかわからない人……♡ まあ、視線が向いちゃうのは仕方ないけど……ちょっと可哀想かな？♡ だってボク、ガード固いし♡」

そう。私服の露出度とは裏腹に、ユカリの普段のガードは非常に固い。彼女自身の中で、見せて良い部分といけない部分がハッキリと線引きされているのである。

タンクトップがどれだけ緩いようでも、その先にある下着は見えない。ファンとのイベントの際には、工夫して露出の少ない服装をしている場合もある。そんなユカリの、少しでも“深部”を見ようとして、邪なファンたちは日夜彼女の出演情報を追いかけているのである。

「でも、キミだけは特別……♡ いいよ、好きなだけ見て♡」

普通の男性であれば視線を逸らしてしまう、見たいと願っても見られないユカリの裸体も、あなたであれば凝視しながら堪能することが出来るのだ。

ユカリはデニムを脱ぐ。スキニーかつローライズなデニムだ。露出度云々の前に似合うか否かで着る人間に対して相当な勇気を求めるその服も、ユカリは難なく着こなしていた。

ユカリの刺激的な私服の下。そこに隠れている下着もまた扇情的——というよりも、苛烈である。

「今日のはどうかな？♡ 可愛い？♡」

ユカリは無邪気に尋ねてくるが、可愛いなどと呼ぶ代物ではない。黒を基調とした下着だが、本来布が果たすべき役割をほとんど放棄している。レースがふんだんに使われ、中に隠れるユカリの素肌を惜しげもなく覗かせる。

下半身も、デニムに負けないくらいのローライズ。普通であれば陰毛が顔を覗かせてしまうくらい。しかし、“睫毛から下の毛は無いよ”とユカリ本人が過去に宣言したように、丁寧に処理されていることによってムダ毛の一本すら見当たらない。

「ほら、後ろも可愛いでしょ？♡」

ユカリが後ろを向くと、そこにはもうほとんど丸見えになっているユカリのお尻があった。乳房に目が行きがちだが、ユカリの尻もまた魅力的である。

「最近の男の子は大きなお尻が好きらしいけど……小さいお尻もいいよね?♡」

ユカリの言うとおり、彼女の尻は乳房の肉感と比すれば小さめである。ジーンズに包み込めば、その小ささが更に強調される。あまりにもぴったりと密着するスキニーなジーンズをユカリが好む故、ラインが透けるのを防ぐために下着もまたいわゆるティーバックにならざるを得ないのだ。

総じて、“下着”ではなく“ランジェリー”と呼ぶのが相応しいと思える、ユカリの扇情的な下着姿だった。

端から見れば勝負下着。けれどユカリにとってはこれが普段使いである。あくまで可愛いもの、気に入ったデザインのもので着けたいと思っていたら、こういう風な代物ばかり揃っていったのだ。

だが、それでもまだ本命ではない。あなたとユカリは、今から一緒に風呂に入るのである。であれば、下着を着けたまま入浴するという道理は無い。あなた同様に、ユカリも裸にならなければ不公平である。

「ふふっ♡ キミ、目が怖いよ♡」

ユカリはそう言いながら、全く怖くなさそうに笑った。あなたの目は、恐らく獣の目をしているだろう。今まで何度も目にして、何ならあなたのスマートフォン宛にも幾度となく“応援アイテム”として自撮りが送られてきたユカリの裸体。それでも、どれだけの回数見たとしても、その興奮が薄まることはない。

ユカリがあなたに歩み寄ってくる。簡単に抱きしめられてしまう距離。あなたの身体が自由が利くのであれば、今すぐにでもユカリを抱きしめ、手込めにしてしまいたい距離。

だが、ユカリからあなたに求められているのは、ブラのホックを外すことだった。

ほんの少し前までは覚束ない手つきだったにも関わらず、今のあなたは造作もなくユカリのホックを片手で外せる。それも、お互いに向かい合ったまま。

っ……ふんっ……♡♡♡

まるで音がしたのだと錯覚するほど大きく、ユカリの乳房が揺れた。ブラの拘束から解放されて、自由を謳歌している。強烈な乳房。あなた以外、世界中のどの男も全貌を見たことがない、ユカリの乳房だ。

「どうかな？♡ たふんっ♡ どたふんっ♡」

自分の口で擬音を発しながら、ユカリは完全にブラを取り去る。性欲まみれの中学生男子が空想の中で思い描いた産物のような乳房が姿を現した。

ブラの支えを失っても、乳房の形は崩れない。ハリのある乳房は丸まるとした形と肌艶を誇るように悠然としている。乳房の大きさと比すれば小さめでピンク色の愛らしい乳首は、やや斜め上を向き、乳房の形の良さを誇示するようだ。

「ボクのおっぱい、本当におもしろいよね……自分でも、作り物みたいだと思うよ♡ でも、これでも正真正銘天然モノ……♡ 指で触ったらどこまでも沈んでいく、魅惑のデカパイだよ♡」

形の次は柔らかさを見せつけるように、ユカリは自分で自分の乳房をこね合わせる。その動作と漂ってくる甘い匂い——デカパイの持ち主にだけ許される谷間のフェロモン臭だけで、あなたは達してしまいそうだった。

「それじゃあ、最後の一枚も……ね♡」

そう言いながら、ユカリはショーツを脱ぎ去った。最後の最後まで、露出度の高いユカリの服装の中でも最後まで隠されていた秘所が露わになる。

しっかりとムダ毛まで手入れされた無毛の秘所。ユカリ曰く元から毛は薄いそうだが、そこから更に手入れを欠かしていない、頬ずりしたくなるような下腹部。

しかし、無毛だからといって決して幼さを感じるわけでは

ない。使い込まれている訳でもない。薄い大陰唇と、ほのかな甘い香り。この世であなただけがこれほどまじまじと凝視できる、ユカリの秘所だ。

「それじゃあ、入ろっか？♡」

長い脱衣ストリップショーを終え、これからが本番である。ユカリに手を引かれて浴室へ連れて行かれる様子はさながらソーブランドのソレだ。

違うのは、場所は少し手狭なあなたの家の浴室だということと……あなたの相手をするのは、どんな高級ソープ店の嬢が相手になっても敵わない、ユカリという極上のあなた専用泡姫だという点だけだ。



「もう……そんなに興奮したらダメだよ♡ ボクは、片腕が自由に動かないキミのために身体を洗ってあげるだけなんだから♡」

ダメなどと言いつつ、ユカリは嬉しそうに弾んだ声で準備を進める。あなたとユカリがいるのは、決して広い浴室ではない。男の一人暮らしなのだから当然である。むしろ、ユニットバスではなかったことだけ、あなたは今の物件を選んだ過去の自分を褒めたい気分だった。

「仕方ないから、キミの大好きなおっぱいスポンジで今日も身体を洗ってあげようね♡ ほら、あわあわ〜……♡」

ユカリはボディソープをタオルで泡立てると、自分の乳房に塗りたくっていく。ユカリがいつの間にかあなたの浴室に持ち込んでからずっと愛用しているタオルは非常に泡立ちがよく、ユカリの大きな乳房も覆い隠せる量の泡を簡単に作り出してしまった。

「それじゃあ、まずは正面から……♡」

洗い場の中心でお互いに立ったまま、ユカリはあなたへ抱きついた。当然のこととして、あなたの身体に一番最初に当たるのはユカリの乳房だ。あれだけハリがあるのに、あなたとユカリの身体の間で変幻自在に形を変える乳房。

むにゅり♡と潰れたそれを使い、ユカリはあなたの身体の正面に泡を塗りたくっていく。

「舌、出して……♡ んっ……ちゅ……♡」

それだけではない。当たり前のようにディープキス。あなたの舌をしゃぶり、唇をついばみ、そしてお互いの舌を絡め唾液を泡立てていく。

ちゅぱっ……♡ ちゅっ♡ ちゅず……りゅ……♡ ちゅっ……♡ ちゅっ……♡

狭い浴室の中にキスの水音が響く。左手はまだ自由に動かない。その悔しさをぶつけるように、あなたの右手はユカリのお尻に伸びていた。

「んっ……♡ お尻も、好き？♡」

ユカリの問いかけに対して、彼女の尻肉を揉むことであなたは応える。あなたの指に吸い付くような尻肌感覚。触るたびに性欲がたぎり、肉棒の膨張が促進されるように感じた。

にゆる……むにゅ♡ たぶ……にゆるん……♡

あなたに尻肉を好き勝手にされつつも、ユカリは丁寧な洗体を忘れない。腰を起用に動かして、乳房を正しくスポンジのように使いながら、あなたの身体の全面を洗っていく。

だが、それだけではない。

ユカリの腰が動くたびに、あなたと彼女の身体に挟まれた肉棒が刺激される。素股とも異なる独特の感覚。ユカリの引き締まった腹部と、それでも柔らかな女性的な感触、そしてへそに付けられているピアスの固さがアクセントとなり、あなたの肉棒を喜ばせるのだ。

「ふふっ♡ どうですか～、お客様？♡ それとも、ご主人様？♡」

あなたに対してかしづく奉仕人の立場として、ユカリは演技をしながら問いかける。あなたは、ユカリの尻肉を更に強く揉むことで満足である旨を伝えた。

あなたへ奉仕するユカリは、非常に積極的だし、知識も豊富だった。それが何故かと気にした過去があなたにも当然ある。不安そうなあなたに対して、ユカリはあっけからんとしてこう応えた。

『だってボク、声優だもん。エロ～い音声だっていろいろやったよ？ ——だから、男の人が好きなことはお見通し♡みんな普通の顔して、結構変態だよね～♡』

ユカリの言葉に嘘はなかったが、しかし彼女自身も認識を誤っている部分がある。

ユカリが今あなたに行っているのは、“男の人が好きなこと”ではなく、正確には“男の人が好きだけど、現実では叶えられないこと”なのだ。

たとえば——デカパイクール系ボクっ子アイドル声優と

混浴して、身体を使って洗体してもらうなど、その極致である。

「んっ……ちゅ……♡ ん、れろ……♡ はあ……♡ 前、そろそろいい感じだね♡ じゃあ次は……後ろ、向いて♡」

湿気に満ちた浴室の中。あなたはユカリに命じられるままに彼女に背中を向けた。

彼女が持つその素晴らしい肢体や綺麗な顔を見えなくなることは名残惜しい。先ほどまでユカリの全身をスポンジにして包まれるようにハグされながら洗体をされていたが、それが終わってしまうのも寂しい。しかし、それ以上の快感がこの後に待っていると知っているからこそ、あなたは抗えない。

情けない話だが、男など女性から与えられる快感を前にしては無力そのものである。

「背中、大きいね♡ ボク、キミの背中好きだよ♡」

あなたの背中に抱きつきながら、デカパイ スポンジで満遍なく泡を塗り込んでいくユカリ。そしてそれだけではなく――

ちゅっ……♡　ちゅぽっ……♡　ちゅ、れろ……♡

あなたの背中に向けて、リップのサービスまで。疲れた背中を労るように丁寧に、軽くついばむようなキスから、吸い付くようなキスまで。

「背中にキスするときに強く吸うと、歯が当たって気持ちいいでしょ？♡　背中舐めてあげるのも、キミは好きだよね～♡ん、れろお～……♡」

あなたの好みを熟知しているユカリは、あなたが気持ちいいと思う場所を的確に責めてくる。その感覚に悶えている間に、あなたの背中もまたユカリの乳房で作ったボディソープの泡まみれにされてしまった。

——しかし、まだ泡の付いていない場所、洗われていない場所がある。

「はい、これでほとんど全部泡まみれにしちゃった♡　おちんちんと……お尻以外は♡」

ユカリが愛でるようにあなたの尻に細い指を這わせる。あなたの尻になど決して触れてはいけないようなユカリの指先。何度経験しても慣れないゾワゾワとする感覚を前にして、あなたは軽く身震いした。

「力、抜いててね……♡ リラックスだよ♡」

ユカリがあなたの背後でひざまずく音がする。大人気声優があなたの家の浴室でひざまづいている。それだけで世間一般からすれば大事件だが、まだこれは始まったばかりなのだ。

「じゃあ、キミはお風呂のフチに右手ついて……左手は楽に  
しててね。で、ボクの方にお尻突き出して～♡ ——そうそう、そんな感じ♡ いい子いい子♡」

ユカリの求めに対して素直に応じるあなた。そんなあなたを褒めるように、ユカリはあなたの尻を優しく撫でた。

あなたにだって、羞恥心が無いわけではない。憧れのアイドルであったユカリに対して尻を突き出している罪悪感も当然ある。



だがそれ以上に、これから行われる行為を知っているあなたは、その快感に抵抗する術を持たないのだ。

ユカリの手があなたの尻肉に触れる。そうして、押し退けるように軽く尻肉を開いてから――

「はあ……ふう～……♡」

細くかすかに、ユカリはあなたの尻穴に向かって息を吹きかけた。

「あは♡ おちんちん、ビクっとしたね♡ キミ、お尻の穴を気持ちよくされるの、本当に好きなんだね♡」

目の前にある肛門に対して嫌悪感を示すでもなく、ユカリはあなたの反応を楽しんでいる。

「じゃあ、次はコレね……♡ ん、ちゅ……♡ ちゅっ……♡ ちゅっ……♡」

そして、尻穴に息を吹きかけられて悶えているあなたの痴

態を楽しんでいるユカリの攻勢が止まることはない。そのままあなたの尻肉に対してキスの嵐。先ほどあなたの背中へ奉仕したときと同じように、つえばむようにキスをしてから強く吸い付く。尻肉を歯の感触で楽しませるようにしながら、あなたの尻を愛でていくのだ。

「ほら、力抜いて♡ ボクはあくまでキミの身体を綺麗にしているだけなんだから、緊張したらいけないよ♡」

ユカリの言う通りだ。いまのユカリはあくまで、あなたの身体を洗っているだけなのである。それも、隅々まで。自分の指で、乳房で、唇で、舌で。

「ん、ちゅ……♡ ん、れろ……♡ ——ふふっ♡ 変な味……♡」

そしてその洗体の対象には、もちろんあなたの肛門も入っているのだ。

ユカリの唇があなたの尻穴に触れる。背骨が全部溶けるような快感。あのユカリに尻穴へキスさせているという優越感

が、快感になってあなたの全身を駆けめぐる。

「ちゅっ……♡ んちゅ……♡ ちゅぱっ……♡ れろ……れ  
う……♡」

ちゅずりゅ……♡ ぢゅ……ちゅ……♡ れろ……ちゅれ  
ろれる……♡

キスだけではない。ユカリの舌が、あなたの尻穴を舐めし  
ゃぶる。現役アイドル声優によるアナル舐めだ。

何故これが気持ちいいのかあなたにもわからない。尻穴を  
舐めしゃぶられて気持ちいいなど想像も出来なかったこと  
だ。優越感か、支配感か。どちらにせよ、“鳴瀬ユカリに尻  
穴を舐めさせている”という実感が、あなたの背後に強烈な  
快感となって広がっていく。

びくっ……びくっ……♡

「ん、ぷぁ……♡ うわ、おちんちんすごいビクビクしてる  
ね♡ 我慢できない、って感じ？♡ 大丈夫だよ、ボクがおち

んちゃんも、気持ちよくしてあげるからね……♡」

そう言いながらユカリがゴソゴソと動く。ユカリに背中を向けているあなたからは、彼女が何をしているのか見ることは出来ない。

だが、今までの経験からして、このあとに行われることが何であるかは容易に想像が付いた。

あなたの両脚、その間に下から柔らかい物体が押し込まれてくる。二つ並んだユカリの乳房だ。両手で揉むだけで全世界の男にマウントを取れてしまうその柔肉が、あなたに“両脚を広げろ”と言わんばかりに圧をかけてくる。

あなたは乳房に脅されるがままに、可能な限り両脚を開く。自然とユカリの目前にある尻穴もハッキリとその姿を表していった。そして、その直下にぶら下がるように勃起するあなたの肉棒。

にゅぷっ……にゅぷぷ……♡

「は〜い♡ キミのおちんちん、ボクのおっぱいの中にご招待〜♡」

その肉棒が柔らかな物体に包まれていく感覚。それが何であるか、あなたは知っていた。ユカリの乳房である。

「ほら、いくよ♡ たばたば♡ ごしごし♡ たばたば♡ ごしごし♡」

ユカリの声にあわせて乳房が動く。まるで肉棒で牛の乳搾りをされているかのようだ。ユカリの乳房はあなたの肉棒をまるまる包み込んでしまい、絶対に逃がさないと言わんばかりにきめ細やかな肌で吸い付いてくる。

「キミのおちんちん、ボクのおっぱいスポンジで綺麗にしてあげるからね♡ ——いや、こんな感じだと、おっぱいオナホかな？♡」

そう言いながらも、ユカリは乳房の動きを止めない。生半可なサイズの乳房では決して実現できない尻尾パイズリ。ユカリは自分自身の乳房を抱きしめるようにして肉棒に対し

て圧をかけながら、一定のペースでピストンを続ける。

「おちんちんからガマン汁すごい出てるね♡ 時々、“パイズリなんて本当は気持ちよくない”っていう人がいるけどさ…  
…ああいう人たちって、本当にパイズリしてもらったことあるのかな？♡ ボクのパイズリで、キミはこんなに気持ちよくなってくれてるのにね♡」

ユカリは無邪気に笑うが、これはユカリの思い違いと言うものだ。誰のパイズリだって気持ちいいわけではない。少し胸が大きい程度の凡百の女によって行われるパイズリでは、男は射精に至るところか、快感を得ることすら難しいだろう。

だが、ユカリのような極上の美女、そして天下一品のデカパイ。それによって行われるパイズリは、すでにセックスと同義である。肉棒を刺激し、精液を搾り取ることに對して、何ら不足はない。

——ずちゅっ♡ ずちゅっ♡ ずちゅっ♡ ずちゅっ♡

あなたの肉棒からこぼれ出たカウパー液を潤滑油にして、

ユカリのパイズリは更に激しさを増していく。あなたは腰が砕けてしまわないように必死だ。自分の手一つでは決して得ることの出来ない、包み込まれるような快感が肉棒を甘くとかしていく。

しかし、それだけではない。

「あむっ……♡ んじゅる……♡ ん、ちゅ……♡ れろ……♡  
ちゅばっ……ちゅ……♡」

——ちゅずっ♡ ちゅっ♡ じゅる……じゅろお……♡

パイズリで肉棒を喜ばせながらも続行されるアナル舐め。下半身すべてを包み込む快楽と優越感。それによって、あなたの理性が蒸発していく。

ユカリという憧れの女性に対してこんな背徳的なことをさせている罪悪感も、自分の怪我に感じていた絶望感も失せていき、彼女の乳房を自分の精液で汚すことしか考えられなくなってくる。

「ちゅっ……♡ んちゅ……♡ えへへ♡ おちんちん、ビクビクしてきたね♡ 出ちやいそうなのかな？♡ もう、せっかくお風呂に入ってるのに……ボクのおっぱいのナカ、ザーメンで汚しちゃうんだね♡」

文字だけ見れば文句に思えるユカリの台詞だが、声色はどこまでも甘ったるい。自分自身の乳房を、あなたの精液で汚してほしがっているのは、実は他ならぬユカリなのだ。

「いいよ～♡ ボクのおっぱいのナカで、たくさん射精して♡ ボクのおっぱいが妊娠しちゃうくらいたくさん射精してほしいな……♡ ん、う♡ ちゅっ♡ んちゅれろ……♡ ちゅっ♡」

ずちゅっ♡ ずちゅっ♡ ずちゅっ♡ ずちゅっ♡

ゆかりの口の動きも、乳房の動きも速くなっていく。もう、あなたの肉棒から精液を搾り取ることしか考えていない。それはあなたも同様だ。射精のことしか考えられない。ユカリの与えてくれる快樂におぼれ、精液を吐き出すことしか考えられない。



ぬちゅっ♡ ずちゅっ♡ たぱっ♡ たぱっ♡ たぱっ♡ た  
ぱっ♡ ずちゅっ♡ ずちゅっ♡

「んれろ……♡ んちゅれろ……♡ ちゅれろえる……♡ ん  
ちゅ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡ んちゅずりゅ……れろ……ちゅ  
ぱっ……♡ ん、んう……っ♡」

——ぶびゅるっっっ♡♡♡ ぶびゅびゅるるるっっっ♡♡♡

望み通り、あなたはユカリの乳房の奥深く、谷間のいちば  
ん狭いところへ向けて、精液を吐き出した。

びゅびゅるるるるるう〜〜♡♡♡ ぶびゅびゅるるるる  
〜〜♡♡♡ びゅぶぶるるるる♡♡♡ びゅるるるるる♡♡♡

「んっ♡ んっ♡ んちゅ♡ んちゅれろ♡ ちゅっ♡ んう♡」

長い射精だ。睾丸の中身どころか、背骨のナカから脊髓ま  
るごと引き抜かれるのではないかと錯覚するほどの射精。そ  
れが全て、ユカリの乳房のナカに吸い込まれていく。

あなたが最後まで気持ちよく射精できるよう、ユカリはアナル舐めもパイズリも止めない。

びゅるるるるる♡ ぶびゅるるる♡ びゅるるる♡ びゅる  
る♡ びゅっ♡ びゅっ♡ ……びゅる♡

そうしてあなたは、尿道に残った最後一滴まで全部全部、ユカリの乳房のナカへ注ぎ込んだのであった。

「ほら見てよコレ♡ おっぱいの間でキミの精液こねて……  
で、広げたら♡ でろお～って♡」

あなたの射精を受け止めきったユカリは、自分の乳房をこすり合わせるようにして精液をこねる。

そしてそのまま谷間を開くと、まるであやとりのように糸を引く精液——ザーメンブリッジの出来上がりだ。

これもまた、普通の女性では容易に出来ない行為。あなたの視線も釘付け……ではあるのだが、それ以上にあなたを悩ませる別の生理的欲求がこみ上がってきていた。

「ん、どうしたの？」

あなたの様子の変化を目撃く察したユカリが問いかける。  
うまく誤魔化せれば苦労はないのだが、ユカリの瞳で射抜かれてはそうもいかない。あなたを見つめる切れ長の瞳に対して、適当な嘘などつける筈もない。結局あなたは、正直に今の自分の状況を伝えることとなった。

「——ああ、おしっこしたいんだ〜♡」

あなたの告白を聞いても、ユカリは幻滅するどころか嬉しそう。そして、一旦入浴を中座してトイレに行こうとするあなたの前に、膝立ちのまま立ちはだかる。

「いま出たら身体冷えちゃうよ？♡ それよりも……ボクの口にしちゃえば？♡」

ユカリの口から出たのは、普通に考えれば耳を疑うような提案だった。

しかし、あなたにとっては驚くべきことでもない。あなたはすでに何回も、このユカリという女性に小水を飲ませているのだから。

さすがのあなたも、最初にユカリの提案を聞いたときには驚いた。ある日、ユカリから恥ずかしそうな顔で——

『あのね……引かないで聞いてほしいんだけど……キミのおしっこ、飲んでみたいな……♡』

などと告白されたときには。

常軌を逸した行動だと思う。自分の尿を飲ませるなど、決して人間相手に、それも憧れの女性に対して行っではいけない行為だとあなたにもわかっている。

——だがそれ以上に、ユカリに小水を飲ませるという行為は、抗い難い背徳感と支配欲の充足からくる快感を持っていた。

決して性的な快感ではない。それとは異なる、ひどく人間的な、ユカリのような美女がどんな行為でも受け入れてくれるという快感があった。

その快感に、今日もあなたは負けてしまう。

「お風呂だから、おちんちん啜えなくてもいいね♡ ちゃんと狙いを定めて、流し込んで♡ ほら、ここだよ♡ ボクの口のナカ……♡ んえ……♡」

ユカリは口を開けて舌を垂らす。ユカリの口は、目一杯開けても小さな的だ。赤い喉の奥に、柔らかそうな——あなた

がいくらでも弄んでいい舌。この舌と喉が、あれほど魅力的な声を生み出す。凜々しい声も、愛らしい声も変幻自在。

相手はユカリの文字通り商売道具。故にあなたも、慎重に狙いを定める。そして――

――じょろ……ちょろろろろろ……♡♡♡

「んっ……♡ んう♡ んっ♡」

ユカリの赤い口内へ向けて、膀胱に溜まった液体を流し込み始めた。



「んっく……♡ んっく……♡ んっ♡ んくっ……♡」

ごくっ♡ ごくっ♡ ごくっ♡

ユカリは喉を鳴らしながら液体を飲み下していく。吐き戻す様子も、不快な様子も見せない。飛び散った滴が、ユカリの乳房を汚していく。

じょろろろろろろろ～～～……♡♡♡

「んっ……んっ……♡ んっ……んっ……♡」

じょろろろ……♡ じょろっ……♡ ちょぼ……♡

ごくっ……ごくっ……♡ ごくん……♡

「んっ……ふう……♡ えへへ、今日もいっぱい出たね～♡」

そうして長い放尿が終わると、まるで自分のことのように満足そうに微笑んだ。



あなたは どうして いいかわからず、遠慮がちにユカリの頭を撫でてあげる。ユカリは、そんなあなたの手のひらを受け入れて、嬉しそうに撫でられる感触を楽しむのだった。

「それじゃあ、お風呂入ってサッパリしよ♡ ——あ、キスはボクが歯を磨くまで禁止ね？ ……恥ずかしいから♡」

ユカリ編 2 了